2020 年 1 月 25 日

JACET-Chubu Newsletter

一般社団法人 大学英語教育学会中部支部　No. 43

第 58 回国際大会（名古屋）のご報告

支部長・大会実行委員長
石川 有香
（名古屋工業大学）

大学英語教育学会第 58 回国際大会（名古屋）は、2019 年 8 月 28 日～30 日の 3 日間、名古屋工業大学にて開催されました。参加者数は 741 名でした。7 年ぶりの中部支部での開催となり、猛暑の中、多くのみなさまにご参加いただきました。ありがとうございました。

目　次

第 58 回国際大会（名古屋）のご報告
石川有香　1 頁
講演会報告 1
野中アンディー氏「プレゼンテーションを通した効果的英語習得」
今井隆夫　2 頁
講演会報告 2
木村友保氏・大石晴美氏・大森裕實氏「大学英語教育の新展開」
小宮富子　4 頁
研究会報告
日英インタラクション研究会
村田泰美　6 頁
2019 年度春季定例研究会のお知らせ
石川有香　6 頁
会員著書紹介
今井隆夫『実例とイメージで学ぶ感覚英文法・語法講義』
大森裕實　7 頁
丹羽義信先生をしのんで
田中春美　9 頁
事務局より　9 頁

大会テーマは “Beyond ‘Borderless’: English Education in a Changing Society（「ボーダーレス」の先に―変革する社会における英語教育）” でした。AI を利用した翻訳機が市販される中で、英語教員はどのような役割を担うべきか。伝統的な学問分野の範疇が揺らぎ、学際研究が進む中で、英語教育学をどう捉え、どう実践していくべきか。小中高大連携・産学官連携の枠組みの中で、大学英語教育は何を目指すべきか。新しい時代の大学英語教育のあり方について共に考える 3 日間となりました。

大会では、基調講演 3 本、招待講演 9 本の他、180 を超える発表がありました。中部支部も「社会言語学と英語教育」「工学と英語教育」「産学官連携と英語教育」など、特別企画を開催しました。素晴らしい研究成果をご発表くださった先生方に心より感謝申し上げます。

全体シンポジウムでは、スイスからご参加いただいた AILA 会長の Perrin 氏、アメリカ応用言語学会長の Matsuda 氏、JACET 副会長の小田氏が、これまでの「英語教育学」を振り返り、今後の学界のあり方について、熱く語ってくださいました。大会テーマと共に、名古屋で行われた ELF 実践としても、記憶に残るものとなりました。

ご参加いただきました先生方に満足していただけるよう，中部支部役員一同、2 年をかけて大会準備を行って参りました。しかし会場設備が十分ではなく、ご不便

をおかけしたことも多々あったのではないかと思います。今後は、この経験を活かして、支部大会・講演会・定例研究会を充実させていきたいと思っております。どうぞ皆様引き続きよろしくご参加ください。

なお、第 59 回国際大会（京都）は、2020 年 9 月 8 日～10 日に、同志社大学新町キャンパスにて行なわれます。大会テーマは "'Well-being' in English Education: Discovering the Possibilities for Learners, Teachers, and Society（英語教育における「ウエルビーイング」― 学習者、教師、社会の可能性を拓く―）" となります。詳細は本部サイト（http://www.jacet.org/convention/2020-2/call-for-papers/）でご確認ください。

講演会報告 1

中部支部 2019 年度講演会 講演

「プレゼンテーションを通した効果的英語習得」

野中 アンディー 氏

（コミュニケーションスキル協会）

2019 年 6 月 15 日

（於：名城大学 天白キャンパス）

今回の講演会では、野中アンディー博士（コミュニケーションスキル協会）をお迎えし、「プレゼンテーションを通した効果的英語習得」という演題でお話をいただきました。ご講演そのものが、博士がお話しされた理想的なプレゼンテーションの在り方を実践されたもので、90 分があっという間に過ぎたと感じるご講演でした。

パワーポイントは使うものであり、使われるものではない。

酒を飲むのはいいですが、酒に飲まれるほど見苦しいものはありません。パワポも同様で、パワポを使ってのプレゼンテーションはプレゼンをよりわかりやすく、魅力的にするのであれば、これほど良い道具はないですが、残念ながら、日本で行われているプレゼンテーションの多くは、プレゼンを行う人が、パワポに使われています。そのようなプレゼンは、Death by PowerPoints とアメリカでは言われているそうです。その理由の１つには、アメリカでは、小学校の頃から show & tell などで、自分の好きなものをクラスメートの前で見せて説明する練習が行われていますが、日本では、プレゼンテーション教育は実質行われてこなかったことがあります。プレゼンの教育を受けていない日本の環境に、プレゼンの道具の１つであるパワポが持ち込まれたのが悲劇で、パワポに使われているプレゼンが横行してしまったのです。Andy さんは、1992 年～1993 年にカンザス大学で、コミュニケーション学に出会い、アメリカ人は、こんなにコミュニケーションについて学んでいるんだと思い、それを日本で教えたいと思うようになったのが、コミュニケーション学を専攻した理由でした。

プレゼンテーションのあるべき姿とは？

プレゼンテーションは、コミュニケーションです。そして、コミュニケーション能力とは、説明する力です。ということは、パワポに縛られて、そこに大量に書かれた文字を読むようなプレゼンテーションでは論外です。聴衆は、あなたに会いに来たのであり、パワポに書かれた

文字を見に来たのではありません。パワポはあくまでわき役、主役はあなたです。

Andy さんは、講演中パワポを 1 回も見なかったのですが、パワポの画面は講演内容に合わせて提示され、しかも、そこには要点が大きな文字で書かれ、聞き手が、講演を集中して聞けるように工夫がされていました。このような講演を実現するために Andy さんはいつも、次のような準備をしてプレゼンに臨んでいるというお話でした。

第 1 段階は、**原稿を書く**ことです。よいプレゼンは、原稿を書くことから始まります。構想（Invention/Brainstorming）からスタートし、それらを論理的に配置（Arrangement (Logic)）します。また、修辞（Style）はプレゼンでは、大切な要因ですので、語彙の豊富さを意識し、少しずつ抽象名詞をばらまくようにします。

第 2 段階は、**記憶**です。書いた原稿を覚えます。Andy さんは、原稿を覚えるという表現を使われましたが、この意味は、丸暗記するということではなく、流れや具体的な表現を、身体化して、アドリブのように伝達できるようにすることを意味すると思います。現に、Andy さんの講演は、その場で、自然に（off the top of his head）話されている感じでした。しかし、実際は、周到な準備をされたものだったのです。

第 3 段階は、**リハーサル**です。原稿を書き、覚えたことを与えられた時間で伝えられるかリハーサルをします。

第 4 段階は、**実践**です。与えられた時間ぴったりに、準備した内容を実演します。Andy さんの講演は、常に聴衆とアイコンタクトを取りながら、パワポを見ることは一度もなく、しかし、パワポの画面はきちんと講演内容と合わせて変わっており、時間ぴったりに講演は終了しました。博士課程の研究発表の授業で、スケートの選手が時間内にパフォーマンスができなければ失格となるように、研究発表も時間ちょうどでできなければ失格ということをおっしゃった教授がいらっしゃいましたが、Andy さんの講演を聞き、その教授の名言がまさにそのとおりと思われる瞬間でした。

Andy さんは、以前は大学で教えておられましたが、Andy さんが伝えたいプレゼン力（つまり、コミュニケーション力）を必要としているのは、大学生だけでなく一般の社会人もだということに気づき、起業されて、年齢や立場を問わないコミュニケーション力の向上を目指すさまざまな方に、プレゼンの指導をされています。これから社会人になる、または、研究を続けていく大学生にも、是非、Andy さんのプレゼンの方法を学び、プレゼン力（コミュニケーション力）を高めて欲しいと思います。

今井 隆夫（南山大学）

Amazing Visions of the Future
Aspects of Human Activity

国際社会への英語の扉
インプットからアウトプットで学ぶ四技能

伊與田 洋之／赤塚 麻里／
土居 峻／梶浦 眞由美／
Marikit G. Manalang ／室 淳子

B5 判　定価（本体 1900 円＋税）
ISBN978-4-523-17888-0

株式会社 南雲堂
〒 162-0801 東京都新宿区山吹町 361
TEL: 03-3268-2311 / FAX: 03-3268-2486

講演会報告 2

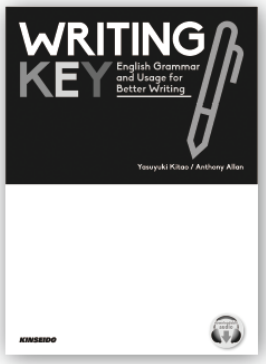
中部支部 2019 年度秋季定例研究会
シンポジウム
「大学英語教育の新展開」

木村 友保 氏
（名古屋外国語大学名誉教授）
大石 晴美 氏
（岐阜聖徳学園大学）
大森 裕實 氏
（愛知県立大学）
2019 年 11 月 16 日
（於：愛知大学 名古屋校舎）

2019 年度中部支部秋季定例研究会では、「大学英語教育の新展開」と題するシンポジウムが開催された。3 人のパネリストが独自の視点を示しつつ、大学英語教育に関する本質的な提言を行い、刺激に満ちた議論が展開された。

木村友保氏は「拡大学習の一事例―多角的視点を目指して―」と題して、名古屋外国語大学での「現代国際学特殊講義 B」がどのような発展学習に至ったかの実践報告を行った。氏の授業実践の魅力は、94 か国の大使館の協力を得て、英語学習と多様な国際事情の学びをリアルに結びつけたところにある。各国大使館スタッフの英語講演を中心に学生の事前研究や事後報告の指導を行っており、「英語への不安」を「発信力」に変えていくための段階的な工夫が取り入れられている。拡大学習としてジョージア、ウクライナ、アゼルバイジャン、モルドバ共和国のメンター外交官と学生が事前研究を行い、学生が各大使館に出向いて英語でのプレゼンテーションやディスカッションを行うことで、報道だけでは知りえない国際事情の気づきにつながっているとのことであり、考える力と感性をも育てうるアクティブラーニングの事例であると思われた。

大石晴美氏は「オールイングリッシュとバイリンガル授業―認知脳科学から見た主体的、対話的、深い学び―」と題して、小・中・高の英語授業での all English 方式では真の学びに到達し難いことを脳科学の視点から指摘した。学習理解度の測定には L1 が必要であり、all English の授業では考える力が低下する懸念があることなどを紹介して、「学習指導要領が求める all English はむしろ主体的、対話的、深い学びに反するのではないか」と氏は主張する。all English では「概念」が脳に達するまでに時間がかかり、学生は「英語が聞けても、読めても、意味を理解で



Writing Key
English Grammar and Usage for Better Writing
英語の感覚をつかむ文法からライティングへ
北尾泰幸 / Anthony Allan 著
文法のエッセンスを良質のインプットで吸収！
英語の感覚を磨き、自然な英文を書くための 15 章
¥1,800 (税別) B5 判 68 pp. 全 15 章 ISBN978-4-7647-4086-0
KINSEIDO 金星堂
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-21
電話 03-3263-3828 FAX 03-3263-0716
text@kinsei-do.co.jp http://www.kinsei-do.co.jp

きない」状態になる場合があり、脳科学的に見ると左脳の言語野である「ウェルニッケ野が活性化していない」状態なのだという。脳の海馬を刺激して「理解」に到達するには母国語の助けが有効であるという氏の指摘は非常に興味深いものであった。実際の教育現場では日本語との bilingual 授業が主流であり、L1 をも活用して学習者の理解を把握しつつ真の理解につなぐ必要がある、というのが氏の指摘であった。

大森裕實氏は「『大学英語教育の芯なき転回』—大学英語教育学は虚像か実像か—」と題して、英語教育学への挑戦的視点を提示した。1960 年代後半に「英語教育学」が焦点化された背景に「英語教育という実践活動を理論的に裏付ける」時代の要請があったことを氏は指摘し、英語教育教授法の歴史を振り返りつつ、英語教育が目標とする「英語力」とは何か、「英語教育学」を「学」たらしめるものとは何かを改めて問いかけた。「英語力」については、山田（2006）Bachman (1990) D.Harris (1969) らの説を引用しつつ、言語形式の知識や運用力のような測定しやすい能力の他に、部分集積型テストでは測れない「基底能力」が含まれることを氏は指摘する。「部分の総和を超える全体（ゲシュタルト）」が英語力であるという考えであり、これは脳の海馬が活性化しなければ（ゲシュタルトも成立せず）知識が理解につながらないとする大石氏の主張にも暗に共通する部分があると思われて、印象的であった。大森氏の大学には「英語高度専門職業人コース」が設置されており、高度な英語運用能力に加えて、総合的で深い学びの習得が意図されている様子である。「英語教育学」に関して大森氏が「芯なき転回」と評したのは、英語教育学を学たらしめる「芯」となるのが個々の教員の学問的専門性であり、それを通して高度な英語力の獲得へと学生が方向づけられるのでなければならない、という英語教育学への警告であるように思われた。

小宮　富子（岡崎女子短期大学）

成 美 堂 2020 年度 新刊のご案内
〒101-0052　東京都千代田区神田小川町 3-22
TEL 03-3291-2261 / FAX 03-3293-5490

Success with Reading Book 1 & Book 2 ..... 2,500 円(税別)
Let's Learn English with Pop Hits! ..... 2,300 円(税別)
Listen Up, Talk Back Book1 ..... 2,300 円(税別)
Science Quest ..... 1,900 円(税別)
VOA Science & Technology Report ..... 2,200 円(税別)
Changing Times, Changing Worlds ..... 1,900 円(税別)
CLIL: Discuss the Changing World ..... 2,200 円(税別)
Surviving in a Global World ..... 1,900 円(税別)
Two Sides to Every Discussion 2 ..... 1,900 円(税別)
AFP World News Report 5 ..... 2,500 円(税別)

Getting Ready to Change the World ..... 1,900 円(税別)
ALL-ROUND TRAINING FOR THE TOEIC® L&R TEST ..2,200 円(税別)
TOP TIPS FOR THE TOEIC® L&R TEST ..... 2,100 円(税別)
PRACTICAL SITUATIONS FOR THE TOEIC® TEST LISTENING
−Revised Edition− ..... 1,300 円(税別)
THE 1500 CORE VOCABULARY FOR THE TOEIC® TEST
−Revised Edition− ..... 1,800 円(税別)
Meet the World 2020　English through Newspapers ...2,000 円(税別)
新・グローバル時代の英語教育 ..... 2,600 円(税別)

SEIBIDO
URL:http://www.seibido.co.jp
e-mail:seibido@seibido.co.jp

研究会報告

日英インタラクション研究会
English and Japanese Interaction
―立ち上げと活動―

1993年から活動を続けてきた中部支部所属の待遇表現研究会は2019年3月をもって活動を停止しました。ほぼ同じメンバーで2019年4月からは日英インタラクション研究会を立ち上げ、積極的に研究に取り組んでいます。待遇表現研究会の活動は四半世紀にわたり、論文や国内外での学会発表のほか、7 件の科学研究補助金獲得、研究書2冊（うち1冊はJACET学術賞受賞）、翻訳書1冊、教科書3冊（うち大学英語テキスト2冊、社会言語学の大学教科書1冊）、一般啓蒙書2冊を出版することができ、英語教育に資する実績を上げることができたと自負しています。

実は2015年に出版した『日・英語談話スタイルの対照研究』（ひつじ書房）では従来のポライトネス研究から談話ストラテジーへと研究対象が移行しました。これは研究会のもともとの出発点となっている疑問、すなわち「聞いたり、発話したりする能力があってもなぜ会話ができないのか」ということを探究し、ポライトネスを経て進んできた結果です。おりしも中央教育審議会の答申に基づいて策定された2016年（平成28年）の外国語の新学習指導要領では、21世紀で求められる人材育成が基本方針の一つとなり、「主体的・対話的で深い学び」が鍵概念として明記されました。

しかし日本人の学生に対して英語教育をするわれわれは、「対話」を理解しようとすれば「対話」とは何か、それを成立させる具体的なスキルは何かを知る必要があるのではないかと考えるのです。母語話者が身に付けている「対話」の基本ルール（ポライトネス含めて）は言語ごとに異なるのではないか、すなわち母語文化に含まれる規範が違うとすればそもそも「対話」が平等に成り立たないのではないか、と。特に英語がELFとして使用される機会が急増していく世界において、日本人が好きな「忖度」や「腹芸」でなく、英語を通してやりとりをしていかなくてはならない中に放り込まれる学生たちに、まさに「対話」ができるようになるには、何を教育していけばいいのかを知るために研究をしたいと考えています。

人と人との「インタラクション」を「対話」を含む言語行動と捉え、日本語と英語（Englishes）における「インタラクション」の実相を探ることで、以上のような疑問に対する答えを求め、最終的にそれらを英語教育への応用に結び付けることを目的として日英インタラクション研究会はスタートしました。この分野に興味をお持ちの方のご連絡をお待ちしています。

村田 泰美（名城大学）

中部支部 2019 年度
春季定例研究会
2020 年 3 月 7 日
於：名古屋外国語大学
のお知らせ

中部支部では 2019 年度春季定例研究会を2020年3月7日（土）に名古屋外国語大学にて開催いたします。定例研究会では、研究発表の他、村田泰美氏（名城大学外国語学部教授）による、特別講演

「インタラクションと英語教育―異文化間語用論の視点―」を行います。

村田泰美氏は、長年にわたって、社会言語学研究の立場から、日本人大学生への英語教育のあり方を論じてこられました。JACET 賞を受賞した『ポライトネスと英語教育』をはじめ、数々の研究成果を発表されておられます。今回は、氏の最新の研究成果の中から、日英のコミュニケーション・スタイルの違いをどのように捉え、今後、大学英語教育にどう活かしていけばよいのか、具体例を交えてご教授いただきます。

また、「インタラクションを重視した大学英語教育」をテーマに、森住衛氏（大阪大学・桜美林大学名誉教授）と新谷奈津子氏（関西大学教授）を講師に迎え、シンポジウムも行います。新谷奈津子氏にはライティング教育の観点から、森住衛氏には異文化理解教育の観点から、それぞれテーマに沿ってお話しいただく予定です。

どうぞ皆様、お誘いあわせの上、ご参加ください。詳細は、決まり次第、中部支部サイトに掲載予定です。

石川 有香（名古屋工業大学）

名古屋外国語大学

会員著書紹介

今井 隆夫 著

『実例とイメージで学ぶ 感覚英文法・語法講義』

2019年10月発行（開拓社, 245pp.）

本書は今井隆夫氏（現・南山大学教授）が先に著わした『イメージで捉える感覚英文法』（2010 年）の延長線上にあって、氏の持論である「認知言語学の知識を英語学習に活かす」ことを実践的に試みた最近 10 年の歩みをまとめた労作で、序文と全 11 講から成る“簡にして要を得た”良書である。

本評者には、その中でも殊に、「序文《はじめに》」、第 1 講「導入講義：文法はカテゴリー化である」、第 8 講「《プロセス》の表現法（動詞）」、第 10 講「《もの》や《こと》の関係の表現法（前置詞）」に認知言語学の精髄が凝集されているように思われる――参考までに、第2－3 講は「日本人英語学習者にありがちな間違い」、第 4 講は「カタカナ表現（日本語）と英語」、第 5－6 講は「形と意味」、第 7、9、11 講は「表現法（名詞）（助動詞）（比較）」を扱っている。

まず、本書の「序文《はじめに》」は単なる巻頭言ではない。この僅か 11 頁の序文に著者の文法観が整然かつ十分に語られているからである――1.文法とはカテゴリー化である；2.文法とはガイドでありルールではない；3.認知言語学と親和性が高い文法説明；4.感覚英文法（Image English Grammar: IEG）とは？；5.英語学習はスキーマ化と事例化の能力を使って；6.英語学習に必要な 3 つのプロセス：理解・記憶・実践。特に、文法とは言語運用における規範ではなく指針であることを強調して、半世紀も前に本評者の恩師によって著述された Keene & 松浪（1969）*Problems in English* に言及している

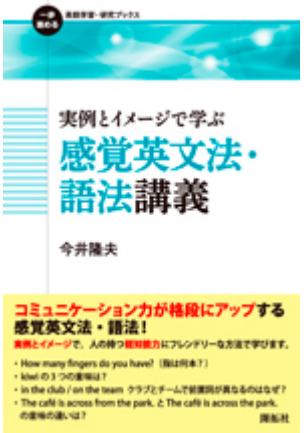
ことも、今井氏の視野の広さと知識の深さを証左している。

次に、第 1 講「文法はカテゴリー化である」において、be＋～ing 形という統語的構文が、名詞「鳥」のカテゴリー化と同一の認知現象として説明され得るという点に目から鱗が落ちる思いがする――be＋～ing 形には「始まりと終わりがある行為の途中」という典型的意味から家族的類似性（この専門用語は敢えて使われていない）のあるものが発展的に含まれるという観点から“John is kicking a ball”（反復性）や“The bus is stopping”（近未来性）の説明が可能となる。

さらに、第 8 講と第 10 講は「英語表現法」を扱う章の一環だが、第 8 講「プロセスの表現法」では「動詞と名詞の並行性」が論じられる点に特徴がある。“主観性の言語学”と称される認知言語学的視点からは、発言者が事態を捉える際に「全体を視野に入れて捉える」か「一部分を視野に入れて捉える」かに基づき、名詞では「不定冠詞 a や複数形語尾 s をつける」（前者）と「裸のまま」（後者）という区分を行なうが、それは動詞の場合にも比喩的に当てはまり、「現在単純形」（前者）と「現在進行形」（後者）の区分に反映される――事態認知において、おそらく前者がデフォルトということであろう。また、第 10 講「関係の表現法」では前置詞が採り上げられ、認知言語学の有力な道具立ての一つ「（TR と LM を使う）イメージ・スキーマ」が効果的に活用されて、視覚的イメージが前置詞の理解にいかに有効であるかを示している。前置詞 OVER の多義性に関する認知言語学的研究はラネカーに詳しく、「（空間的にも時間的にも）半円弧を描くイメージ」で首尾一貫した説明が可能となったことはまだ記憶に新しい――それを修正した安藤貞雄（2012）『英語の前置詞』も有益である。“前置詞が分かれば英語が分かる”と言われるほど、英語学習者にとって前置詞の習得は難しいが、具体的事例を伴ない、それに分かりやすい解説を施している。“事例をもって語らしめよ”は往年の『クラウン英和辞典』編纂者であった河村重治郎氏の言葉だが、本書もその精神を受け継いでいる。

最後に、どのような本であっても軽微な誤植は免れないが、自著の書名に誤植があるものは稀有である。「はしがき」でも「参考文献」でも 2010 年の著書名は訂正する必要がある。また、本質とは関わりないが、「はしがき」（x）6 行目「生まれたのではないかと予測できます」は「・・・と推測できます」の誤りであろう。さらに余計なことを附言すれば、本評者であれば、本書を「12 講」構成にしたほうが体裁がよいと考えたであろうに。いずれにしても、我々が若い頃に『英語語法辞典』（クエスチョン・ボックス）や検定教科書用 *Teacher's Manual*（往年は言語知識に関する記述がすこぶる充実していた）から貪るようにして得た知識について、平易な言葉で学習者の気づきを促す説明の仕方をもって（惜しげもなく）記述した本書は、英語教員を目指す人にとっては必読の書であると言えよう。

大森 裕實（愛知県立大学）



丹羽義信先生をしのんで

長い間評議員として JACET 中部支部に貢献してくださった丹羽義信先生が昨年末に 96 歳で亡くなられた。つい最近までお元気で、役員会などにも出席しておられ、貴重なご意見を述べておられた。

先生は、『古代英語動詞接頭辞 Ge-の研究』（松拍社、1973）などで、1975 年に名古屋大学で文学博士号を取得されたばかりでなく、写真集『丹羽義信海外写真作品集』で代表されるように、例年海外へ出かけられ、お帰りになってしばらくして、写真展を開かれ、私も数回行ったことがあるが、その腕前は素人はだしであった。また、かつて在籍しておられた広島高等師範のオーケストラでは第 2 バイオリンを弾くほどであった。また、LLA（Language Laboratory Association 語学ラボラトリー協会、2000 年からは LET Language Education and Technology）の会長を長く（1988-1994 年）務められ、名古屋大学定年後に移られた中部大学で国際学会 FLEAT（Foreign Language Education and Technology）2 を成功に導かれた。

丹羽先生の長年にわたる研究・教育・多趣味などについては、2004 年に松拍社から出版された『美的生活のすすめ』や、2018 年に金星堂から出版された『美的感動を求めて』に書いておられる。

このように多才な丹羽義信先生を失ったことは、JACET 中部支部ばかりでなく、この東海地方にとっても大きな損失である。丹羽義信先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。　　（2020 年 1 月）

田中 春美（南山大学名誉教授）

掲示板

『JACET 中部支部紀要』第 18 号への掲載論文の投稿（学術論文、研究ノート、実践報告、書評）を募集します。ぜひ奮ってご応募ください。

締切:　2020 年 9 月 10 日
刊行予定：　2020 年 12 月
掲載料:　刷り上がり 1 ページにつき、1,000 円の負担
長さ:　研究論文 23 ページ以内、実践報告 15 ページ以内、研究ノート 15 ページ以内、書評 5 ページ以内
問合せ: JACET 中部支部事務局

投稿方法等の詳細については紀要の投稿規程およびホームページでご確認ください。

中部支部紀要編集委員会

事務局より

◆ 新入会員のご紹介

2019 年 4 月から 2019 年 12 月までの中部支部 所属新入会員は以下の方々です。（敬称略、入会順）

田中 敦子（岐阜県立可児高等学校）、長峯 貴幸（名古屋外国語大学）、橋崎 諒太郎（名古屋大学[院] ）、島崎 治子（静岡大学[院] ）、Clarke, Stephen（名古屋短期大学金沢大学）、ダガン さがの（国際基幹教育院外国語教育系）、リア クリストファー アダム（名古屋外国語大学）、加藤 雅子（中部大学[非]）、田島 弥（岐阜大学）、ヒスロップ ジェーン（名古屋外国語大学）、生田 美希（名古屋大学[院]）、柳瀬 弘美（名古屋外国語大学）、碓井 エリザベス（富山県立大学）

◆ 2019年度第 2 回支部総会報告

11月16日に開催された第2回JACET中部支部総会で2020年度事業計画及び予算案・人事案が了承されました。

2020 年度 中部支部役員（敬称略）

顧問

田中 春美 （南山大学名誉教授）

吉川 寛 （中京大学）

倉橋 洋子（東海学園大学名誉教授）

理事・支部長

石川 有香 （名古屋工業大学）

理事・副支部長

佐藤 雄大 （名古屋外国語大学）

支部事務局幹事

伊東 田恵 （豊田工業大学）

支部会計幹事

三上 仁志 （中部大学）

支部研究企画委員 ＜50 音順＞

安達 理恵（愛知大学）、石川 有香（名古屋工業大学）、伊東 田恵（豊田工業大学）、今井 隆夫（南山大学）、大石 晴美（岐阜聖徳学園大学）、大森 裕實（愛知県立大学）、岡戸 浩子（名城大学）、木村 友保（名古屋外国語大学名誉教授）、リーア・ギルナー（愛知大学）、倉橋 洋子（東海学園大学名誉教授）、小宮 富子（岡崎女子短期大学）、佐藤 雄大（名古屋外国語大学）、塩澤 正（中部大学）、鈴木 達也（南山大学）、馬場 景子（中部大学[非]）、藤原 康弘（名城大学）、三上 仁志（中部大学）、吉川 寛（中京大学）、吉川 りさ（豊橋技術科学大学）、梁 志鋭（名古屋学院大学）

◆ 2020年度JACET国際大会ご案内

第 59 回（2020年度）国際大会は2020年 9月8日(火)～10日(木) に同志社大学にて開催されます。

大会テーマ：英語教育における「ウエルビーイング」― 学習者、教師、社会の可能性を拓く―

“Well-being” in English Education: Discovering the Possibilities for Learners, Teachers, and Society

詳細はJACET大会ホームページをご覧ください。

◆ 2020年度JACET中部支部大会ご案内

2020年6月6日に中京大学にてJACET中部支部大会を開催する予定です。詳細は中部支部ホームページをご覧ください。

◆ 事務局からのお知らせ

2019年 4 月より中部支部事務局は豊田工業大学伊東田恵研究室内に移転しました。支部運営についてのご意見ご要望などございましたらお気軽にお寄せ下さいませ。なお、 JACET 関係のご連絡につきましては、メール表題に【JACET 中部】とお書き添えください。

◆ 住所変更届提出のお願い

支部会員のみなさまに、紀要やNewsletterなどの郵便物をお届けできない事例が増えています。お手数ですが、転居の際には、JACET 本部事務局と中部支部 事務局の両方に、住所変更届をご提出ください。 詳細は、以下のサイトをご覧ください。

・JACET 中部支部ホームページ
http://www.jacet-chubu.org/

◆ ニューズレターは会員の皆様のフォーラムです。ご意見、ご要望等は事務局までメールでお送りください。投稿も歓迎いたします。

JACET 中部支部事務局

〒468-8511 愛知県名古屋市天白区
久方二丁目 12−1
豊田工業大学 伊東田恵研究室内
E-mail: tae@toyota-ti.ac.jp

***JACET-Chubu Newsletter* No. 43**

2020 年 1 月 25 日発行

発行者： 一般社団法人 大学英語教育学会
中部支部 （代表）石川有香

編集者： 伊東田恵 佐藤雄大 北尾泰幸